



情報理論とその応用学会ニュースレター

西安雑感 小川 明 (名城大学理工学部)
 ISITA2002 報告 片山 正昭 (名古屋大学 ISITA2002 TPC-Chair)
 ISITA2002 参加報告 五十嵐 保隆 (埼玉大学大学院理工学研究科 博士後期課程 1 年)
 2002 年度第 2 回理事会報告
 ISBN の件
 国際会議のお知らせ

西安雑感

小川 明 (名城大学理工学部)

今年 10 月 7 日から 10 日の間、第 8 回情報理論とその応用国際シンポジウム (ISITA2002) が中国の古都西安で開催され、無事というより成功裡に終えることができました。その実行委員会に加わった一員として、ほとんとすると同時にこのシンポジウムの実行に携わったメンバーの努力に対し、深く敬意を表するしだいです。

シンポジウムは、情報理論とその応用学会と西安交通大学との共催でしたが、それと同時に非線形理論とその応用国際シンポジウム (NOLTA2002) との併催でもありました。西安交通大学は、ISITA、NOLTA 両者に対して共催という立場でした。今回、ISITA と NOLTA は公式には併催ではありませんでしたが、実際の運営はほとんど一体とな行われました。中国という距離的には近いが、事情のわからない部分のある国で開催するために、論文審査、セッション構成、プロシーディングス発行、会計、会場設定、参加登録、行事などについて、水も漏らさぬと言って良いくらい周到な準備がなされました。実行委員会のメンバーのその並外れた努力には本当に頭が下がる思いです。

それでも実際うまくいくのか、特に西安交通大学側と協力して支障なくできるのか一抹の不安を持って現地に臨みました。ところが、西安交通大学側の予想以上の、しかもつぼを心得た準備と態勢に出会い、いささか驚くと同時にこれならうまく行けそうだとひと安心しました。会場準備、登録受付、セッション実施などのために 30 人の現地の学生アルバイトをお願いしたのですが、正直なところ学生達がどの程度のレベルなのか心配でした。ところが、それはまさに杞憂であることがわかりました。彼らおよび彼女らは、英語はもちろんのこと、何人かは日本語にも堪能で、シンポジウムを運営するのに十分すぎる能力と意欲を持っていました。なにしろ 3 倍程度の希望者の中から選ばれたとのことで、このことは当然のことだったかも知れません。

アルバイト学生達の節度と礼儀があり、しかも積極的な



態度に接していると、西安市中の交通の無秩序が信じられない思いがします。自動車は、排気ガスを撒き散らしながら、われさきに突き進み、歩行者は信号を無視して道路を横断します。自動車の数は、交通マヒを起こすほど多くないようで、もう少し節度を持って運転をし、交通信号の数を増やせば、むしろ早く目的地につけるのではないかと思います。わき道に入ると、狭い道路に店がはみ出し、車がすれ違うのが大変です。もっと道路を広く使えるようにし、一方交通にしたら良いのと思いました。夕方に街中でタクシーを拾うのに大変難儀します。運良く拾えたと運賃をごまかされないよう注意しなくてはなりません。タクシー料金は日本に比べて格段に安いのですが、油断しているとごまかされることがあると聞き、タクシーを利用するときには、メーター通りにしか払わないと確認をして、遠回りして目的地に行かないよう注意しました。

西安およびその郊外には名所旧跡が多くあり、その中には兵馬俑の発掘展示場のように貴重なものもあります。当然そのようなところには土産物店が軒を連ね、売人が群がって売りつけます。値引きをして買うのが当たり前で、言い値よりどの位安く買えたかが、品物の本当の価値よ

りも興味の対象になり、他の人が同じものを自分より安く買ったことを知ると、損をしたような気になります。もちろん、市中の高級スーパーなどでは、日用品など定価販売しており、日本と殆ど同じような気分で買い物ができるのですが、この間の格差が大きいため、とまどいを感じました。

西安交通大学の学生食堂でランチ定食を食べ、その安さに驚きました。質量とも十分なもので、10 人民元（約 150 円）でした。街のレストランでも同様の安さで食事ができました。印象的だったのは、ウェイトレスの愛らしさと誠実なサービスです。これだけのサービスで 150 円では申し訳ないと思いつつも、チップは払ってきませんでした。

西安交通大学の学生食堂は、大きく明るい雰囲気を持っていました。この大学のキャンパスは広く、設備、スタッフ、学生の質など、大変豊かで立派なものだとの印象を持ちました。大学の周囲の街路には、関連ベンチャービジネスが軒を連ね、大学の地域産業への影響の大きさを感じました。西欧の有名大学に匹敵するような環境を見ると、中国政府の大学に対する力の入れようがうかがえます。このような立派なキャンパスの一步外に出ると、我勝ちの交通状態が現出しているのに一種不可思議な感じがしますが、西安の町は発展途上にあり、交通マヒなどは大したことではなく、むしろ我勝ちに突き進むエネルギーの方が重要なのかも知れません。

今回シンポジウムの計画を進めていく過程でとまどいを感じたことがいくつかありましたが、その一つは、参加費支払いに関連したことで、当初参加費を円建てで支払にしたのですが、中国に人達にとってクレジットカード決済や人民元を円に替えることが容易でないことがわかり、中国の人達に対しては、急ぎよ人民元で参加費を支払えるようにしました。中国が今大きく発展していながら、旧態依然の為替管理状態にあることに不思議な気がします。西安の街中に満ちているエネルギーの一方で、会場のホテルのフロントのサービスや、西北航空の機内サービスの悪さが印象的でした。政府の関係した施設ではこうなるのでしょうか。

以上のように、西安に約 1 週間滞在して、中国あるいは西安では一見相反しているような事柄が混在している中で社会が動いていると感じました。でもそれよりも強く感じるのは、中国には混在する種々の矛盾する事柄を超越したいわゆる辺境（フロンティア）が存在し、それに向かって個人や企業がそれなりに頑張ればよい目が見られるという意

識です。今回手伝ってくれたアルバイト学生達は、自分たちの将来は洋々として開けていると思っているようです。

これと対比的なこととして、陝西歴史博物館を訪れたとき、その入り口の石段に日本の高校生の一団がズボンを下げてだらしく座っているのを見ました。多分中国の歴史なんぞには興味がなく、抜け出してきたのでしょうか、その無気力な姿を日本では見慣れているとは言え、西安まで来て見ることに腹立たしいものを感じました。今の日本には、現在の中国や終戦当時の日本に存在した普遍的な辺境（フロンティア）がなく、それでいてハングリーでないので、多くの若い日本人が明日への希望や生きがいを持っていないのはある程度仕方ないことかも知れません。でもこのことは、日本始まって以来の危機を含んでいるのではないのでしょうか？この危機を救うのは教育だと思います。若い日本人たちに辺境を作り上げる能力を植えつけなければなりません。そのためには、教師の数をもっと増やし、きめの細かい教育を行うべきです。

特に技術立国を標榜するのであれば、理工系教育の役割は極めて重要です。でもわが国の工学系大学教育について言えば、あまりに貧乏です。隣国の中国や韓国よりも劣ります。外国の大学と比較して、最も劣る点は、大学における若い研究者の数が極めて少ないことです。現在は制度上からあるいは経済上から、大学では若い助手クラスの研究者を多く雇うことができません。もちろん博士課程の学生を増やすことが考えられますし、そうしなければならないのですが、実際はその就職難のことを思うと増やす勇気が出ません。彼らの就職口を増やす意味でも若い助手クラスの数を少なくとも全国の国公立の理工系大学の教授、助教授、講師の総数の 2 倍程度にする必要があると思います。大学に若いプロの研究者がいるようになれば、博士課程の学生を増やすことができ、研究は活性化し、学生の教育も十分行き届くようにできると思われます。太平洋戦争の末期に特攻隊が登場したのは、戦闘機を自在に操れる若い優秀なパイロットがほとんどいなくなってしまい、敵艦に突っ込むより仕様がなくなったためと聞いています。その他の場面でも若い優秀な人材が枯渇してしまったことが日本を敗戦に導いたとも言えます。

以上のことは、もともとそう思っていたことであるし、世間的にも言い古されていることでもあるのですが、今回西安でのシンポジウム開催に関わって、その感を深くしたこともあり、ここに述べさせて頂きました。

ISITA2002 報告

片山 正昭 (名古屋大学 ISITA2002 TPC-Chair)

2002年10月7日から11日、ISITA2002がNOLTA2002 (2002 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications) と共に、中国西安市の西安国際会議中心 (Xi'an International conference Center) において開催された。ISITA2002だけで241名、NOLTA2002を合わせると500名を超える多数の参加を得た。一方の国際会議の参加登録者は、他方の国際会議のセッションにも参加できることとした。参加者の名札は、紐で首から下げるタイプで、ISITAは青、NOLTAは緑、組織委員は赤と紐の色で区別したが、遠くからでもわかりやすく、好評であった。

初日にはISITA、NOLTAの共同企画として特別講演を実施し、Y. X. Zhong, Joachim Hagenauer, Martin Haslerの3氏に、ISITAとNOLTAの各々の研究分野のホットピックスと両学会の研究分野の共通性について、魅力ある講演を頂いた。この特別講演は、参加登録者以外の地元大学の学生・研究者にも開放したため、千人規模の会場が一杯になる盛況であった。

一般投稿については、ISITA2002に投稿された論文258件の各々に2名の査読委員をお願いした。査読は出来る限り発表のチャンスを与える方針で行い、最終的に229件が採録となった。地域としては、日本(123件)、中国(64件)をはじめとして、全体で10ヶ国である。

会場となった西安国際会議中心はホテルも併設しており、美しい庭園を取り囲む回廊沿いに会議室が設置されている。ハードウェアとしては、過去のISITAと比べて遜色のないものであった。もっとも「国際会議」を冠した施設ではあるものの、今回のISITA、NOLTAのような大規模かつ国際的な会議は、初めてということであった。そのためある程度、組織委員会側で「指導」する必要もあった。しかし大きなトラブルもなく無事運営を行うことができた。

各々のセッションは、いずれも多数の参加者を得、観光名所も多い西安で最高の季節といわれる秋の開催であるにもかかわらず、最終日まで活発な発表・討議が行われた。バンケットは、同センター併設のホテルで行われた。バンケットでは、陝西省常務副省長、西安市副市長ら政府高官が来賓として出席され、西安交通大学を始めとする大学の学術活動に対する政府の強い期待を感じた。

最終日のFair Well Partyは、西安随一の餃子の老舗である徳発長で行われた。色とりどりの動物や植物をかたどった細工の美しい餃子の数々に、箸をつける前にカメラ撮影を繰り返す参加者の姿が見られた。このレストランの料理の写真を会議初日より受付に掲示し、「最終日には、こんなに楽しい事がある」というメッセージを送りつづけたことも、最終日まで参加者が減らなかった理由であるかもしれない。

本年は、ISITA2002 Paper Award for Young Researchers (ISITA2002 若手奨励論文賞) を設けた。これは



1967年以降に生まれた若手研究者で今回のISITAにおいて第一著者として執筆・発表を行うものを対象とし、アブストラクトの査読の得点と最終投稿論文に基づき、対象者146名から10名の受賞者を選んだ。全員が大学に所属する大学院生、研究生で日本の大学に所属するもの6名、中国3名、カナダ1名であった。受賞者は、表彰状と賞金を、最終日のFair Well Partyの席上でうけとった。またISITA2002 Travel Support for Students (ISITA2002 学生旅費助成) は、査読スコアと投稿最終論文に基づき対象者69名より20名を選んだ。

今回のISITA2002の成功は、中国側実行委員長のNanning Zheng 西安交通大学教授を始めとする同大学の方々の献身的な努力に負うところが大きい。特筆すべきは、国際会議を体験したいという理由で応募し、数倍の競争率の中、筆記試験と面接試験(!!)で選ばれたという20名の優秀な西安交通大学の学生スタッフである。自分たちの役割を瞬く間に理解、流暢な英語(日本語科の学生は日本語も)を操り、揃いのオレンジの上着に身を包み、早朝から深夜まで献身的に働く彼ら彼女らの姿は、多くの会議参加者を感動させた。またNOLTA2002の実行委員との協調関係も非常にスムーズであった。中国側委員・スタッフと共に、NOLTA2002の実行委員の方々と出会えたことは、私にとってのISITA2002の喜ばしい成果であると感じている。

ISITA2002 参加報告

五十嵐 保隆 (埼玉大学大学院理工学研究科 博士後期課程 1 年 情報数理学専攻)

会議が開催された中国の西安市街では多くの自動車が走っており、通りには有名ブランド店が建ち並び、中国经济が大きく発展していることを実感できました。また、タクシーの運行は遊園地のジェットコースター並に迫力(?)があり、驚きであると同時に楽しみでもありました。現在、西安市街には明代に建設された古い城壁が残されており、その城壁の厚さは乗用車 3~4 台分、高さはビルの 4~5 階分ぐらいで、周囲は 14km 程もあり、当時の人々の多大な労力の末に完成したことがひしひしと感じられました。さらに、唐代に建設された城壁の周囲は明代のものの数倍もあったと聞き、さらなる驚きでした。研究発表会場となったホテルは立派で、従業員のサービスも良く、会議期間中快適に過ごす事ができました。

学会で用意して頂いた観光ツアーでは、世界遺産である兵馬俑や歴史博物館などの数多くの名勝旧跡を丸一日かけて見学でき、疲労困憊しましたが、最後まで興味深く見学することができました。私はやはり兵馬俑が一番印象的で、東西 210m、南北 60m、深さ 4.5~6.5m というスケールの大きさに圧倒されました。210m 離れたところにいる人は米粒程の大きさに見えます。そこに実物大ほどの兵士や軍馬の陶器(?)が数千体も配置されているのです。

さて、私は海外での研究発表は初めてではないのですが、まだまだ経験不足で、気持ちに余裕はありませんでした。質疑応答時に英語力の不足と緊張が原因で質問の意味を勘違いしてしまい、少々的外れな返答をしてしまい、申し訳なく思いました。そこで、セッション終了後に改めて返答し直したところ、有益な助言を頂きました。

私はこのようにまだまだ若輩ものであるにも関わらず、今回幸運にも ISITA2002 若手奨励論文賞を受賞することを許されました。受賞をたいへんうれしく思うとともに、賞に恥じないためにも今後さらに研究に邁進しなければならないと感じました。会議初日の受付時に、受賞と最終日のパーティーの席上で表彰されることを知りました。表彰時に司会者からコメントを求められるかもしれないと思ったので、会議の空き時間にコメントを推敲していました。ところが実際は、何もコメントは求められず、安堵したのですが、考えてきたコメントを発表できず、少し残念な気持ちになりました。そこで、このように ISITA2002 の参加報告を執筆できる機会を SITA 編集理事の大橋正良様から頂きましたので、受賞者の代表としてそのコメントを発表し、本文を締めくくりたいと思います。

受賞対象となった研究では、コヒーレント超短光パルス CDMA 通信システムにおいて偏波モード分散の影響を理論的に解析しました。コヒーレント超短光パルス CDMA 通信システムとは、長距離超高速伝送に優れ、WDM、TDM



と並び将来有望な光多重通信システムの一つです。また、偏波モード分散とは光ファイバのコアの歪み等によって伝送信号が歪む現象であり、長距離超高速通信システムの大きな性能劣化要因の一つです。本研究の結果、通信システムを実際に構築する以前に偏波モード分散の影響を評価することが可能となり、システムの仕様(伝送速度、多重度)の設定に大変有効であるという成果が得られました。

我々受賞者は研究を初めてまだ日の浅い学生であるにも関わらず、このような素晴らしい賞を受賞することができてたいへん光栄です。多くのお祝いのお言葉も頂き、誠にありがとうございました。我々の研究を進めるにあたり、ご指導頂いた先生方並びに関係諸氏に深謝いたします。さらに、会議期間中お世話になった会議運営委員の方々、会議参加者の皆様にも感謝申し上げます。

我々一同、今回の受賞を励みとして今後も益々、各々の研究に精進し社会の発展に貢献できるよう努力していこうと思っておりますので、皆様のご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

2002 年度第 2 回理事会報告

日時：平成 14 年 7 月 13 日（土）12:00-15:00
場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階
（神奈川県横浜市）

議題：

1. 2002 年度第 1 回理事会議事録の承認
2. 2001 年度会計報告監査および監査報告の予定
3. 2002 年度会計予算執行状況および会費集金状況
4. 2002 年度事業中間報告および計画
5. 2002 年度ニューズレター発行および計画
6. SITA2002 開催計画および準備状況報告
7. ISITA2002 開催計画および準備状況報告
8. ISIT2003 開催準備状況
9. 名誉会員の推薦について
10. SITA 奨励賞選考について
11. 2002 年度版名簿発行について
12. SITA ホームページについて
13. 新規入退会者の承認について
14. 特許法第 30 に基づく学術団体の指定について
15. 報告
 - (1) ISPLC2003 からの共催依頼について
 - (2) ISITA2002, ISIT2003 に対する電気通信普及財団補助金申請の推薦について
 - (3) その他
16. その他

ISBN の件

本学会が ISBN の発行資格を有する機関として日本図書コード管理センターに登録されましたことをご報告いたします。

本学会に与えられた ISBN 出版者記号は 902087 です。これにより、本学会が発行する書籍の ISBN は以下のようになります。

ISBN：4-902087-#1#2-#3

#1#2 は書籍記号を表し、#3 はチェック記号です。（#1, #2, #3 はともに 0 から 9 までの数字）

上記にしたがって、ISITA2002, SITA2002 の講演予稿集から順次、ISBN 番号を付与していきます。

なお、ISBN の処理に関する説明書である「実施の手引き」および本学会に割り当てられた ISBN の管理に用いる「コード台帳」は、学会事務局で保管しております。ご不明の点がございましたら学会事務局 (sita-office@sita.gr.jp) までご連絡いただけますようお願いいたします。

（参考：ISITA2002 と SITA2002 講演論文集の ISBN）

- ・ Proceedings of ISITA2002 vol.1：4-902087-00-6
- ・ Proceedings of ISITA2002 vol.2：4-902087-01-4
- ・ SITA2002 講演論文集 第 1 分冊：4-902087-02-2
- ・ SITA2002 講演論文集 第 2 分冊：4-902087-03-0

国際会議のお知らせ

以下のご案内する内容につきましては、変更になっている場合もありますので、ご自身でのご確認をお願い致します。最新情報は以下のサイトをご覧ください。

- ・ IEEE Information Theory Conference and Workshop : <http://www.itsoc.org/confs/frcon.html>
- ・ IEEE Communication Society Conference : <http://www.comsoc.org/confs/>

MILCOM 2004

日時 2004 年 10 月 31 日-11 月 03 日
場所 Monterey, CA, USA
URL
原稿 締切 (TBD)

ISSSTA 2004

日時 2004 年 08 月 30 日-09 月 02 日
場所 Leura, Australia
URL <http://www.isssta2004.org/>
原稿 締切 2004 年 02 月 01 日

ISIT 2004

日時 2004 年 06 月 27 日-07 月 02 日
場所 Chicago, USA
URL <http://www.isit2004.org/>
原稿 締切 (TBD)

ICC 2004

日時 2004 年 06 月 20 日-24 日
場所 Paris, France
URL <http://www.icc2004.org/>
原稿 締切 (TBD)

VTC-2004 Spring

日時 2004 年 05 月
場所 Genoa, Italy
URL
原稿 締切 (TBD)

WCNC 2004

日時 2004 年 03 月 29 日-03 月 31 日
場所 Dallas, USA
URL
原稿 締切 (TBD)

INFOCOM 2004

日時 2004 年 03 月 07 日-11 日
場所 Hong Kong
URL <http://www.ieee-infocom.org/2004/>
原稿 締切 (TBD)

Globecom 2003

日時 2003 年 12 月 01 日-05 日
場所 San Francisco, USA
URL <http://www.globecom2003.com/>
原稿 締切 2003 年 02 月 15 日

WPMC 2003

日時 2003 年 10 月 19 日-22 日
場所 Yokosuka, Japan
URL <http://www1.ilcc.com/WPMC/index.html>
原稿 締切 2003 年 03 月 31 日

TENCON 2003

日時 2003 年 10 月 14 日-17 日
場所 Bangalore, India
URL <http://www.ewh.ieee.org/r10/bangalore/tencon2003/index.php>
原稿 締切 2003 年 03 月 15 日

MILCOM 2003

日時 2003 年 10 月 13 日-10 月 16 日
場所 Boston, MA
URL <http://www.milcom.org/2003/cfp.htm>
原稿 締切 2003 年 01 月 10 日

VTC-2003 Fall

日時 2003 年 10 月 04 日-09 日
場所 Orlando, Florida
URL <http://www.vtc2003.org>
原稿 締切 2003 年 02 月 15 日

PIMRC 2003

日時 2003 年 9 月 7 日-10 日
場所 Beijing, China
URL <http://www.pimrc2003.org>
原稿 締切 2003 年 02 月 21 日

ISIT 2003

日時 2003 年 06 月 29 日-07 月 04 日
場所 Yokohama, Japan
URL <http://www.isit2003.org/>
原稿 締切終了 (2002 年 11 月 01 日)

ICC 2003

日時 2003 年 05 月 11 日-05 月 15 日
場所 Anchorage, USA
URL <http://www.icc2003.com/>
原稿 締切終了 (2002 年 08 月 15 日)

VTC-2003 Spring

日時 2003 年 4 月 22 日-25 日
場所 Seoul, Korea
URL <http://www.vtc2003spring.org/>
原稿 締切終了 (2002 年 09 月 15 日)

ICASSP 2003

日時 2003 年 04 月 06 日-10 日
場所 Hong Kong
URL <http://www.eie.polyu.edu.hk/~icassp03/>
原稿 締切終了 (2002 年 10 月 25 日)

Information Theory Workshop

日時 2003 年 03 月 30 日-04 月 04 日
場所 Paris, France
URL <http://itw2003.enst.fr/>
原稿 締切終了 (2002 年 11 月 30 日)

INFOCOM 2003

日時 2003 年 03 月 30 日-04 月 03 日
場所 San Francisco, USA
URL <http://www.ieee-infocom.org/2003/>
原稿 締切終了 (2002 年 07 月 11 日)

WCNC 2003

日時 2003 年 03 月 16 日-20 日
場所 New Orleans, USA
URL <http://www.comsoc.org/confs/wcnc/2003/index.html>
原稿 締切終了 (2002 年 09 月 01 日)

編集後記

早や師走の声を聞く時節となってまいりました。全く一年というものは瞬間に過ぎるものだと感じます。

さて本号では ISITA2002 に関する記事を多く寄せていただきました。会合は大変実り多いものであったようです。

今月 SITA'2002 が伊香保で開催されますが、同様に活発な議論が行われることを期待しています。

次号は情報源符号化ワークショップ特集を計画しています。
(大橋)

編集担当者

杉村立夫 (編集理事)

〒 380-8553 長野市若里 4-17-1
信州大学工学部電気電子工学科
Tel. 026-269-5237
Fax. 026-269-5220
Email tsugimu@gipwc.shinshu-u.ac.jp

野上保之 (編集幹事)

〒 700-8530 岡山市津島中 3-1-1
岡山大学工学部通信ネットワーク工学科
Tel. 086-251-8128
Fax. 086-251-8127
E-mail nogami@cne.okayama-u.ac.jp

大橋正良 (編集理事)

〒 356-8502 上福岡市大原 2-1-15
(株)KDDI 研究所無線エンジニアリンググループ
Tel. 0492-78-7862
Fax. 0492-78-7521
E-mail ohashi@kddilabs.jp

村田英一 (編集幹事)

〒 152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1
東京工業大学大学院 理工学研究科
電気電子工学専攻
Tel./Fax. 03-5734-3573
E-mail murata@mobile.ss.titech.ac.jp

情報理論とその応用学会事務局

〒 194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1
玉川大学工学部情報通信工学科
通信システム工学研究室内, 山崎浩一 気付
Tel: 042-739-8442 (直通)
Fax: 042-739-8858
E-mail: sita-o.ce@hn.is.uec.ac.jp